

日本一の スチューベンの魅力を発信



鶴田町が生産量日本一を誇るスチューベンぶどうが収穫期を迎え、町では観光ぶどう園やスチューベン祭りが開催されるなど、スチューベンの魅力を多方面に発信しました。

日本一！スチューベンぶどう 全国へ発送開始



△スチューベンゆうパックの積み込みを行う生産者たち

町特産のスチューベンを全国の消費者に届ける「スチューベンゆうパック出発式」が10月8日（木）、道の駅つるた「鶴の里あるじゃ」で行われました。

式では、農業法人「津軽ぶどう村」の須郷代表取締役が「全国のスチューベンファンに甘さが詰まったスチューベンを食べてもらいたい。新型コロナウイルスに負けずに、例年通り1万ケースの発送を目指す」とあいさつ。また、ひなづる幼稚園の園児たちが和太鼓の演奏やお遊戯を披露し、ゆうパックの出発式を盛り上げくれました。

この日は積み込み作業を生産者らが手伝い、スチューベンゆうパック第1便の800ケースがトラックに積み込まれました。記念のテープカット後には、スチューベンが積み込まれたトラックは園児や出席者らに見送られながら全国へ向け出発していきました。

県庁でスチューベンの出来栄を報告



△青山副知事（右）にスチューベンをPRする相川町長（左）

10月8日（木）、相川町長と津軽ぶどう協会の成田会長らが青森県庁に青山祐治副知事を訪ね、今年産のスチューベンの生産状況報告とスチューベンぶどう祭りのPRをしました。

成田会長は「雨の影響で着色が遅れていますが、昨年よりも糖度が高く、生産量も多く、よい出来栄になっています」と報告。

青山副知事は「地理的表示保護制度に登録され、完全にブランド化の定着がされたと思います。スチューベンを楽しみにしている多くの方に喜んでいただけるようこれからも頑張ってください」と激励しました。その後、青山副知事は今年度産のスチューベンを試食し、出来栄の良さを確認していました。

スチューベンの皮を再利用で個性的なハンカチを

地域おこし協力隊の山田園実さんは、観光ブドウ園の開園期間中、スチューベンの皮やジュースの搾りかすを使った草木染体験会を開催しました。

草木染めは模様をつけるためにビー玉やペットボトルのふたなどをハンカチで包み、輪ゴムで縛ったものをスチューベンの煮汁に漬けることで、紫の独特の色合いに染まったハンカチにさまざまな個性的な模様が現れます。人によって模様の違いや色の付き方に違いがでて、ひとつとして同じものができないことも草木染めの魅力の1つです。

草木染めの体験会は来年度以降も行う予定だそうです。



△観光ぶどう園で行われた体験会の様子



△山田さんが作成したスチューベンの草木染め